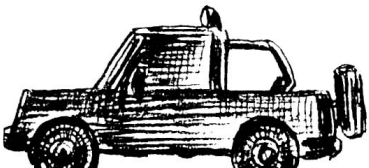
森の奥の怪しい家

高橋義夫



森の奥の怪しい家　定価一三〇〇円（本体一二六二円）
第一刷発行　一九九二年七月十五日

著　者　高橋義夫
発行者　野間佐和子
発行所　株式会社　講談社
〒112　東京都文京区音羽二―一二―二一
電話　編集部　〇三―五三九五―三五〇五
　　販売部　〇三―五三九五―三六二二
　　製作部　〇三―五三九五―三六一五
印刷所　大日本印刷株式会社
製本所　株式会社黒岩大光堂

落丁本・乱丁本は小社書籍製作部宛てにお送りください。送料小社負担にてお取り替えいたします。なお、この本についてのお問い合わせは、文芸図書第二出版部宛てにお願いいたします。
©YOSIO TAKAHASI 1992 Printed in Japan

ISBN4－06－205974－6　（文2）

目次

一章　ぶなの木の崇(たた)り　5
二章　あの光るのが月山湖　34
三章　廃屋の破れ障子　64
四章　弁当箱はマムシの家　94
五章　崖の下の熊　125
六章　幽霊の日記帳　155
七章　清貧研究会御一行様　192

装幀　下谷二助

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

森の奥の怪しい家

一章　ぶなの木の祟り

1

天窓の隙間からさしこむ朝陽が、光の帯になっている。細長いスクリーンの上を無数の塵が白く輝きながら、渦巻いたりさざ波になったりする。塵の模様はいっときも同じ形をとどめていない。慎太郎は蒲団のぬくもりの中で、目覚めのときのこんな風景をずいぶんひさしぶりに見るような気がした。

日曜日だ。ばかに気分がさわやかだ。台所から味噌汁の匂いが漂ってきた。庭で小鳥が啼き交す声がきこえる。寝がえりを打つ拍子に、股の間に毛布をはさみこむ。それが刺激になり、大事な物が固くなってしまった。しばらくいい目ば見させてねえはげな、ごめんよと、慎太郎はひとりごとをいい、パジャマの中に右手をつっこみ、慰めはじめた。はじめはなんとなく冷やかしの感じだったが、そのうち本気になった。

「慎太郎、いつまでハァ寝てる気だ。目腐れるべちゃ。あっ」

小さな叫び声と同時に、襖が音を立てて閉じられた。おっ母にいたずらをみつかったと気がついたときは、もう止まらなかった。ちょうどクライマックスだ。頭の中で、顔のないまっ白の裸

体がうねうねと動いていた。
十五分ほどたってから、栗の花の匂いをまとわりつかせて、慎太郎は仏頂面で囲炉裡がある居間に出て行った。目覚めのさわやかな気分はふき飛んでいる。卓袱台に朝餉のしたくが整っていた。目玉焼に香の物、味噌汁、ゆうべの残りの冷えた煮物。いつも判で押したような朝の献立だ。
「ほれ」
と、母親のかつが飯を茶碗にてんこ盛りにして、慎太郎の前に置く。下唇を突き出し、かつはそっぽを向いた。かつの視線のさきに仏壇がある。四十の若さで脳卒中で亡くなったかつの夫、慎太郎の父の遺影が、ぼんやり笑っている。ああ、とかつはため息をもらした。
「三十にもなって、あげなおかしげな真似することはねえべなハァ。おなごのいねえ娑婆じゃねえべした」
かつは亡夫の遺影にむかってひとりごとをつぶやいたつもりらしいが、慎太郎の耳には一言一句はっきりときこえるのである。
「なんだよ。朝っぱらから肝焼けるなあ」
慎太郎は乱暴に茶碗を置いた。いきおい余って手を味噌汁の椀にひっかけ、熱い汁が膝にかかる。
「あちっ」
「小ばかくせえ。なにするだハァ。ほだな勿体ねえことして、罰あたるべ」
「いいハァ。おれ食欲ねぐなった」
席を蹴って、慎太郎は居間を飛びだした。ゴム長に両足をつっこみ、履きかけて踵の下にゴム

をふかふかさせながら、赤いジャージのパンツのポケットに両手を入れ、のめるように土間を走り出る。

おもしぇくねえ。婆くそ。勝手にひとの個室さ覗くな。厭味ばいいくさって。おなごのいねえ婆婆じゃねえべした、てか。おなごいるなら連れてきてけろ。おれだって好きで独身でいるわけでねえべす。慎太郎はぶつぶつ口の中で文句をいいながら、裏の田んぼの畦道を歩いた。とうに稲刈りはすみ、水が落ちてひび割れた田に、ちょんまげを並べたように刈り穂の株が残っている。畦にはせかけの丸太が組まれ、天日干しの稲束が朝陽を浴びて黄金色に光る。ひとをばかにしたように、鳶が頭上を遊泳している。

谷川に沿って林道を一キロほど登ると、慎太郎は額にうっすらと汗をかいた。ぶなの林を吹きぬけてくる風が肺を洗う。不愉快な気分は、いつのまにか消えていた。空腹を感じた。慎太郎は毎朝、大きな茶碗に三杯飯を食う。そうとうひどい宿酔のときでも大盛り一杯は腹に入れる。癇癪をおこして朝餉をぬいてきたことを後悔しはじめた。

帰って飯を食おうかと一瞬考えたが、母親の顔を思い浮かべるとうんざりした。嫁をもらえと、くどくどかき口説くに決まっているのである。嫁をもらうといっても、若い娘はほとんど村に残らず、残っているのは婿をとりそこねたあととり娘だから、なんとかしろと母親がいうのは、役場の結婚相談員にお願いに行けということである。無駄に決まっている相談なんかに誰が行くべかと、慎太郎は思う。

谷川にかかる橋をわたり、廃坑の入口が残るむかしの鉱山の麓の切り通しをぬけると、急に視界が開ける。そこは山に囲まれた小さな盆地で、中央に周囲二キロほどの小さな沼がある。土地の者は龍神沼と呼んでいる。切り通しの出口で、慎太郎は足を止めた。

ぶなの根元に髪の長い若い娘が立っている。赤いセーターの上から白いツナギを着て、頭にバンダナを巻いている。腰を曲げ、ぶなの根に手を伸ばした。

慎太郎は悲鳴をあげそうになった。一瞬、女が亡霊のように見えたのだ。場所が悪い。女が手をさしのべているぶなの木は、五年前に村の若い娘が首を縊った木だった。

「あの、すみません、ちょっといいですか」

女から声をかけられた。慎太郎はパーマの髪に指をつっこんでかきむしりながら近づいて行った。例の匂いを嗅ぎつけられるかもしれないから、十歩ほど離れたところで立ち止まる。近くで見ると、娘というほど若くはなかった。服装でだまされたのだ。色が白く、瞳がくりくりとして頭がよさそうで、鼻すじは通っているがそれほど高くもなく、美形というより愛敬のある顔だちだ。年齢は三十を過ぎているかもしれない。

慎太郎が緊張して固い表情でみつめるので、彼女はひるんだ顔つきになった。

「あの、わたし、そこのペンションに越してきた者ですが」

高く澄んだいい声だった。

「この茸、食べられますか」

彼女はぶなの根元から採った白いひらたい茸を両手の掌に乗せ、慎太郎に見せた。

「食えるちゃ。ぶなかのかだ。バタ炒めがいいずゥ」

「なんでしょうか」

「食える」

彼女は不安そうな表情になり、茸を指さすと、その指を箸にして食べる真似をして、小首をかしげて見せた。方言が聴き取れないのである。おれを外国人みたいに思ってると、慎太郎は自尊

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

心を傷つけられたが、つい彼女につりこまれて、食べる真似をし、腹をさすって満足そうに笑って見せた。

「ああ食べられるのね。ありがとう」

彼女はぶなかのかを集めはじめた。慎太郎はそこからひき返してもよかったのだが、ペンションの様子を見たくなり、龍神沼のほうへ歩いて行った。

龍神沼を囲む三方の山々は円錐型の美しい形だ。盆地の底から眺めると、慎太郎のような素人にもスキー場にしたらよさそうだと思える。数年前、スキー場開発の噂が立ち、慎太郎が住む正道寺という戸数十戸の集落の中を観光道路が通るという話で、慎太郎も浮き足立ったことがあった。地元の建設会社が龍神沼の周囲の土地を買収し、丸木小屋のペンションを二棟建てたので、すぐにでも龍神沼周辺は一大観光地となるかに思われた。

スキー場開発の噂はどこから出たのかわからないが、いつの間にか立ち消えとなり、観光道路もできなかった。なにもない場所に二棟の丸木小屋だけが残った。建設会社は安い値段でそれを売りに出したが、地元の人間は笑うばかりだ。ところが、都会には物好きがいるもので、雑誌に小さな広告が載ると希望者が殺到して、すぐ売れてしまった。最初に買った二家族はペンションを開業して三年目にしめし合わせて夜逃げした。地元の業者で燃料代や食料品代を踏み倒されたのがかなりいる。またすぐ二家族がやってきたが、これも去年商運つたなく撤退した。その後半年ばかり二軒とも空家になっていたが、また一組新しい被害者がやってきたわけである。

ペンションの入口に立つと、ベランダに人がいるのが見えた。小ぶとりで後頭部が禿げている。赤いチェック模様のシャツに革のベストを着て、ジーパンを穿いている。三十メートルほど離れた隣の空ペンションを双眼鏡で覗いていた。彼は双眼鏡を覗いたまま首をまわし、慎太郎を

見た。やあっと人なつこそうに手を挙げ、ベランダの端に寄った。
「土地の方ですか」
「んだ。正道寺の者だ」
「お茶でもいかがです。おあがりなさい」
彼の姿がベランダから消えた。はじめての家に上がるのは不躾ではないかと慎太郎はためらったが、背後にぶなかのかの女性が近づく気配を感じて、ふらふらとペンションの中に入った。

こうして慎太郎はペンション『花童』のオーナー夫婦と知り合いになったのである。
オーナーは三津田敏克といい、五十二歳。なんとかいうコンピュータ会社の広報課長だったと敏克は大層なことのようにいったが、慎太郎は何度きいても横文字の社名が覚えられない。妻の麻衣子、といっても正妻であるかどうか疑わしいのだが、彼女はもとフリー・アナウンサーで三十歳、慎太郎と同い年である。フリーなんとかがどんな仕事なのか、これも慎太郎には想像がつかない。彼女は明るく人なつこい性格らしいので、慎太郎は好感を抱いた。
麻衣子は西洋の少女が遊ぶ青い絵を染めたしゃれたコーヒーカップを慎太郎の前に置いた。慎太郎の真向いの椅子に腰をおろし、大きな瞳でまじまじとみつめる。慎太郎は緊張して手がふるえそうなので、両手を股の間にしっかりはさんでいた。対人恐怖症の気がある。とくに女性の前だとはげしく緊張する。婆んつぁまだと、気が楽なのだが。
「それにしても……」と、本でも朗読するような調子で、敏克がいう。「いいところですなあ。ぶなの林がなんともいえない。杉の木が植えられていない山を見ると、ほっとします。秋の湖水のしずかなこと。えっ、湖じゃない。ただの溜池ですか。いや、そんなことはないでしょう。十

和田湖だってこんなに神秘的な水の色じゃない。こういう美しいところに住めるなんて、夢のようです」

頬杖をついて窓の外をみつめる。太い指に金の指輪がくいこんでいる。あの指輪は高価そうだ。あんまり深くくいこんでいるから、指を切らなければとれないだろうなと、慎太郎は話に関係のないことを考えた。

それよりも気になるのは、敏克はひとりで十五分ほど龍神沼の住環境を誉めそやしたが、煎じつめれば住むにはいい所だというので、観光地として商売になる土地かどうかには関心がなさそうなのだ。これでは前車の轍を踏んで遠からず夜逃げするのではないかと心配になる。

敏克と慎太郎が話している間に、麻衣子がテーブルの上でぶなかのかを籠から紙の箱に移した。

「あんまり採りすぎたから、少しおすそわけします」

「いらね、たくさんだ」

慎太郎は激しく手を振った。首縊りの木の根っ子に生えたものだとはいえなかった。麻衣子は箱を手にしたまま、釈然としない顔を敏克に向けた。

「地元の人にすすめるのも、かえって失礼かもしれないよ」

敏克が助け舟を出した。

「不調法じゃねえはげ、おらは食いあきてるべす、ぶなくせえ屁ば出るハァ」

と、慎太郎はぼそぼそした調子でいった。麻衣子は方言のヒヤリングがよくできないので、あいまいに笑う。ちょっと間を置いてから、

「ぶなの匂いのするおならですか。こりゃあいい、風流だ」

敏克が手を拍って笑いだした。田舎のことなら、なんにでも感心する人だと、慎太郎は呆れ果てた。

「なんなの。ねえ、なんの話？」

麻衣子が幼女のような甘えた声を出して、敏克の赤シャツの肘をつまんで引っぱった。彼が慎太郎の言葉を翻訳すると、

「あら、いやだ。なんだか食べにくくなるじゃない」

といい、麻衣子は慎太郎の膝を軽く叩いた。やわらかくあたたかな掌の感触が残った。こんな感触はいつ以来だろう。二年前、会社の同僚と温泉旅行をして、バアのホステスに叩かれて以来ではなかったか。あのときは目の玉の飛び出るような料金をむしり取られたが……。慎太郎の頬が火照った。

2

正道寺は江戸時代に出羽三山の修験者のための宿坊があり栄えた所だ。明治維新の際に廃仏棄釈の嵐にまきこまれて正道寺が廃寺になってから、さびれる一方である。寺は遺構しかなく地名だけ残っている。ものの本によると、江戸時代末期の山岳信仰がさかんだったころは、関東一円から「お行さま」が訪ねてきて、二十数軒の宿坊がならび、文字通り門前市をなしていたという。

慎太郎の家は屋号を頂礼坊といい、もとは正道寺門前の宿坊のなかでも筆頭に立つ家柄だ。廃仏棄釈のあと商売替えをしなければならなくなった。わずかな農地と山林があり、父親までの三

代にわたって農業と炭焼によってかつかつに食べてきた後、慎太郎は農業を嫌い、製材会社のサラリーマンになった。しかしサラリーマンといっても日給月給制で将来の保証はなく、むかしふうの遠慮のないいいかたをすれば、日雇いのきこりである。

慎太郎には弟と妹がひとりずつある。二人とも地元の高校を卒業すると喜び勇んで家を出て行った。弟は仙台のラーメン屋に勤めて、はやばやと結婚し、二十七歳にして二人の子持ちだ。妹は東京に出たが、十九歳のときに一度暴走族のような青年と一緒に帰ってきて、わたしこの人についてゆくべじゃん、どこの方言だかわからないしゃらくさい言葉を残して去り、それきり連絡がない。けっきょく長男の慎太郎だけがまだ独身で、五十五歳の母親と暮らしているのである。

頂礼坊のほんらいの家業は農業でなく宿坊だという意識が慎太郎にはある。これは遺伝子に刷りこまれた情報であるとみえて、亡くなった親父もいつもそんなことをいい、野良仕事に身が入らなかった。慎太郎の仕事は雪が降れば休み、社長が遊びに行けば休みというぐあいで、月に二十日も実働日数はない。休みの日に野良仕事を手伝えば、母親はにこにこしているが、慎太郎は母親が上機嫌な顔でいるのを見ると腹が立って、こだな小ばかくせえことしてらんねえ、おらは百姓でねえずゥと捨て科白を残して、家を出てしまうのである。

龍神沼のペンションが気にかかるのは、おらはほんらい宿坊のあととりだという意識が慎太郎を動かすのかもしれない。心の底にペンションをやってみたいという憧れがある。

月曜日の朝、慎太郎が出勤すると事務所の駐車場に停めた車のシートを倒して寝そべってカーステレオを聴いていた同僚が、窓から顔を覗かせた。

「慎太郎、今日は休みだと」

「なして休みだべか。なにもきいてねえど」
「社長が帰って来ねえとよ。これんとこさ沈没したんでねえべか」
同僚は小指を立てた。日曜日に外出したまま、どこからか明日は帰れないから会社は休みにすると電話をしてきたのだという。休みだと宣言すれば、従業員に日当を払わずにすむのだ。
「小ばかくせえ」
慎太郎は唾を吐き捨てた。急に休みにされても困る。行くところがない。軽トラックの運転席に坐り、しばらくラジオを聴いていたが、ふと龍神沼のペンションを思い浮かべた。ベランダのテーブルで、紅葉の山々を眺めながら、麻衣子のいれたコーヒーを飲む。旅行雑誌のグラビアにそんな写真があったような気がする。慎太郎は自分がそんなしゃれた風景画の点景人物になる姿を思い描き、うきうきした気分になった。
軽トラックを運転して林道を登った。落ちた山栗の実を食べていたらしいリスが、驚いて道を横切る。ラジオが午前八時の時報を告げた。
ペンションの駐車場に敏克のランドクルーザーがあり、赤煉瓦の煙突から薪ストーブの白い煙があがっているから、敏克と麻衣子は中にいるはずだが、戸は内側から鍵がかかっていた。二度ばかり呼んだが応答がないので、慎太郎は裏にまわった。
ベランダに上がり、窓から中を覗く。ガウンを羽織った麻衣子が、ストーブの前のベンチにくずおれていた。おりたたんだ両腕に顔をうずめ、身じろぎもしない。
「ガス中毒でもおこしたんでねえべか。生きてるかや。麻衣子さん、おい、麻衣子さん」
慎太郎は窓ガラスを叩いた。麻衣子が顔を上げる。血の気が失せ、目の下に隈ができている。力なく立ち上がると、ベランダの戸を開けた。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com